旧村川別荘だより

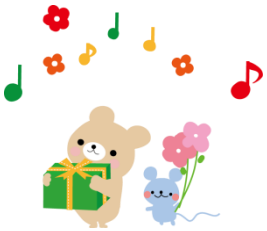
133号

平成30年4月23日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：木村、田中、手嶋
〒270-1166
我孫子市我孫子1684番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

月例会が開催されました

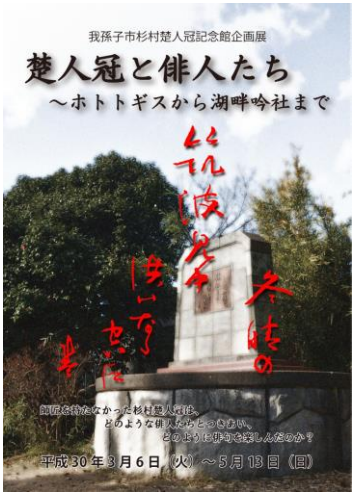
　新年度となりました。また、新しい気持ちを持って、一つ一つのことを行っていければと思います。今年度も改めてよろしくお願いいたします。＾＾

　さて、4月4日（水）に月例会が開催されました。現在、ガイドのみなさんは総勢30名となりました。新しいガイドの方も、それぞれのお一人でシフトに入っていきます。お互いに顔を覚えながら、新しい知識を勉強しながら、みんなで頑張っていきましょう。また、一年よろしくお願いいたします！



楚人冠の俳句哲学

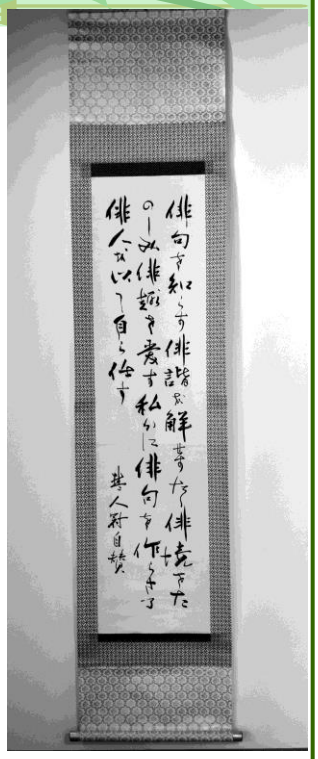
　今回は、3月6日（火）～5月13日（日）まで杉村楚人冠記念館で開催しております、企画展「楚人冠と俳人たち～ホトトギスから湖畔吟社まで」について、勉強しました。



　この企画展では、楚人冠自身が作った俳句も紹介していますが、それ以上に、楚人冠と交流した俳人たちを紹介することにも力を入れています。俳句を通じた人脈形成を通して、楚人冠の俳句哲学を学んでいきます。

●杉村楚人冠の俳句

　まず、楚人冠の俳人としての特徴は、特定の師匠を持たず、独学で俳句を楽しんだことにあります。普通、俳句を学ぶのには、作った作品を師匠に頼んで見てもらいますが、楚人冠は師匠ではない4人に添削してもらいました。師匠を持たない代わりに多くの人の意見を取り入れ、作られていることがわかります。それは、逆に俳句界での楚人冠の交流の広さを示しています。



楚人冠はたびたび、俳句をやらないと自称していましたが、実際は俳句を作っています。なぜでしょうか？

「俳句を知らず俳諧を解せずただ俳境を楽しみ俳趣を愛す私かに俳句を作らぬ俳人をもって自ら任ず」（楚人冠自筆書幅：右写真）

⇒俳句を作ることよりも、「俳境」「俳趣」が大切、という哲学を持っていたことがわかります。

俳諧といふものは、一種のライフそのものであつて、ある思想を十七字にまとめるといふやうなことは、寧ろ第二義に落ちたものといはれぬだらうか。（「俳句を作らぬ俳人」『楚人冠全集』第16巻十三年集）

　楚人冠にとって「俳諧」とは「ライフそのもの」でありました。だからこそ、楚人冠が我孫子に移住したあとに多くの作品を残した意味は大きいのです。

●ホトトギスの俳人たち

　交流した人の数でいえば、やはりホトトギスの俳人が多かったと言えます。

今若し私が是非とも或る一派の仲間入をしなければならぬとなつたら、私は一も二もなくホトトギス派に就いて虚子の門下に参ずる。病人がよく流行る医者に就きたがるのと同じ心理である。（「門外季観」『楚人冠全集』第16巻　十三年集）

⇒仲間を多いほうがいい、という考えであり、作風については言及していません。

○高浜虚子

　正岡子規の流れをくみ、ホトトギス社を東京に移転して発展させます。花鳥諷詠の伝統的な作風です。

楚人冠が京都で教師をしていた明治29年ごろ、関西の若い同人が集まった京阪俳友満月会以来の関係でした。

沼べりの寒さを愛したりけんか　虚子

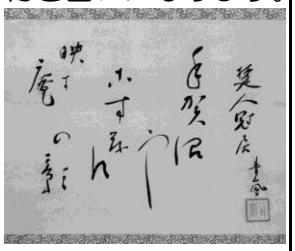
楚人冠句碑の除幕式に際しての献句です。沼べりの暮らしを愛した楚人冠を表現しているものと思われます。

〇赤星水竹居

小岩井農場、丸の内ビルの経営を成功させた三菱地所部の幹部。ホトトギス社の丸の内ビル入居を機に虚子について俳句を始める。楚人冠とはロータリークラブで親しくなった。故郷の熊本県八代市鏡町に立つ句碑は、楚人冠句碑と同じく中央から右、左の順に読ませる書き方をしている。

〇永田青嵐

関東大震災後の東京市長を務め復興にあたるなど政官界で活躍しました。虚子同様、楚人冠とは明治29年の満月会以来の付き合いになります。



楚人冠居

手賀沼やこすもす映す庵の影

青嵐

題のとおり、楚人冠邸の様子を詠んだ句。

〇水原秋櫻子

ホトトギスの4Sと通称されたほどの代表的歌人だったが、のちに虚子から離れ、抒情性を強調した新興俳句運動を始めました。手賀沼へも吟行によく訪れていたそうです。

〇山口青邨

東大俳句会の一人。故郷の岩手県で俳誌を主宰するなどの縁があり、その旧居は岩手県北上市に移築。

このように楚人冠以外にも、ホトトギスの面々が手賀沼へ多く訪れ、俳句を残しています。当時の俳人にとって、手賀沼は情緒あふれる場所であったと言えるでしょう。

●独自の道を拓いた俳人たち

自ら俳誌を主宰し、そこに楚人冠の投句を受けていた俳人たちも中にはいました。

〇飯田蛇笏

最初ホトトギスで活躍しましたが、故郷である山梨県境川村に帰郷した際、ここで俳誌『雲母』を主宰し、息子龍太とともに親子俳人として知られています。楚人冠は自分だけでなく、朝日俳句会の仲間とこぞって蛇笏の『雲母』に投句していました。

〇伊東月草

新傾向俳句の提唱者大須賀乙事に師事、のちに俳誌『草上』を主宰しました。『草上』もまた楚人冠が盛んに投句した俳誌です。

この状況を鑑みるとホトトギスの虚子、雲母の蛇笏、草上の月草と、楚人冠にとって投句の前提は、作風や派閥ではなく、その主宰者との交流であり、楚人冠の俳句は人付き合いの一つであったのではないか。まさに前述のライフそのものであります。

●楚人冠の道を継ぐ　～湖畔吟社

楚人冠の哲学そのままに、楚人冠は俳句の指導はしませんでした。それは、主眼は「集まる」ことにあると考えられます。⇒楚人冠が中心になって作った湖畔吟社の青年たちのネットワークこそが財産！

俳句会とはいふものの、これを指導する先生もなければ、随つて、ここから大俳人を出さうといふ野心もあるわけでない。ただぼんやりと集まるかはりに、俳句を看板にしたまでである（「湖畔吟社」『楚人冠全集』第5巻湖畔吟）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

楚人冠が重視したのは、俳句をとおして人と交流することでした。湖畔吟社もその延長上にあります。楚人冠が我孫子の青年たちに望んだのは、俳味のある生活であり、将来有望な青年同士が俳句をとおして交流することであったといえるでしょう。

次回の月例会は・・・

次回は平成30年5月1日（火）9時30分から新館で行います！！

※訂正※　4月30日（月）が振替休日のため、翌日の平日はお休みです。そのため、5月1日（火）は休館日でした。すみませんでした。シフトに入っていた方はお休みとなります。お手数おかけいたしますが、よろしくお願いいたします！(>_<)

旧村川別荘だより

134号

平成30年5月24日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
教育委員会　文化・スポーツ課
担当：木村、田中、手嶋、今野
〒270-1166
我孫子市我孫子1684番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

月例会が開催されました

５月１日（火）、ゴールデンウィークの真ん中に月例会を行いました。今回から新たに今野が加わりました。 新規採用で分からないこともたくさんあります。前からお話ししていた方も、初めての方もよろしくお願い申し上げます！

月例会では、シフト調整ともに今年も母屋が散歩市の会場となることをお伝えしました。６月３日（日）まで行われます。何かお気づきの点があれば、事務局までお知らせください。

井上家資料の整理について

今回は、昨年度末に刊行された『井上家資料目録』についてお話ししました。

井上家は布佐地区に江戸から続く名主で、手賀沼干拓を行っていました。その井上家を整備するにあたって、家の整備はもちろんですが、井上さんから寄贈していただいた文書などの資料を整理する必要がありました。その総数は約18,000点！だいたいは紙資料ですが、書籍、民具などさまざまなものが記録されました。その記録方法、記録した資料などをご紹介しました。

●なぜ、資料を整理するの？

目録にしなければ、その資料の存在が分かりません。図書館で本を検索するように、資料を検索できる状態にしておかないと、活用することはできませんよね。そのため、みんなが使えるようにデータにしておく必要があります。

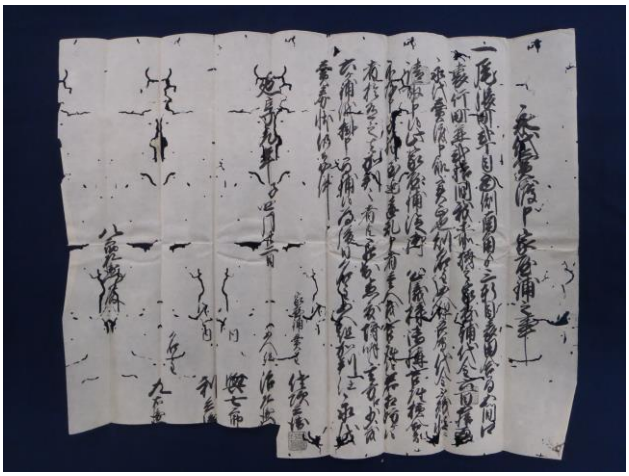
●どうやって資料を整理するの？

まず、現状の把握をするため、写真を撮ります。そして、運び出すため、順番に資料を箱に詰めていきます。このとき順番にする理由は、…例えば、みなさんは請求書など一括で保存したりしませんか？昔の人も同じで、大切な書類を年代順に並べるよりも、同じ種類でまとめたりしています。そのため、置いてあったとおりに箱詰めをするのです。

その後、一点ごとや、一つのまとまりごとに資料を封筒に入れ、その資料が特定できるように資料に名前をつけたり、作られた年代や作った人を確定したりします。

そして、その内容を表にして、やっと目録が完成するのです！！今回の目録は全3冊860ページになりました。それでは、今回整理した資料を少しご紹介しましょう。

●文書資料より



紙資料の場合は、「資料」とも書きますし、「史料」とも書いたりします。史料と書かれていると紙資料だな。と分かります。

上の写真は井上家の屋敷が江戸にあった時代にできた文書で、江戸の屋敷を売り渡したことが分かります。井上家には手賀沼干拓に関する資料がたくさんありますが、一部江戸に住んでいた時の資料も残っています。

●美術関係の資料より

井上家は、新しい家を幕末に建てたおり、交流のある絵師を呼んで、襖などに絵を書いてもらいました。その絵師の絵は軸としても残されています。

その他に明治になると家人の中に浮世絵を集める趣味の方がいたらしく、367点の浮世絵が見つかりました！内容は、江戸時代の浮世絵が少しと、明治以降の役者絵が多数見つかりました。早稲田大学にある演劇博物館では、数多くの浮世絵が保存されていますが、演劇博物館でも保存されていない浮世絵も少しありました。

保存状態は良い物と悪いものがあり、すぐに展示することは難しいですが、少しずつ修復をして展示していきたいと思っています。

井上家で見つかった浮世絵

月例会では、修復した浮世絵も一部ご紹介しました。

上の写真は、修復前の浮世絵です。下の写真は、修復した浮世絵です。上の写真の右端の浮世絵になりますね。左上の部分が欠けていましたが、和紙が充てられているのが分かります。基本的に修復は保存に適した形に直すものなので、掛けている部分を着色し、作品に手を加えるようなことはありません。

●民具

井上家には名主であったことを示す裃（かみしも）や、米を貯えるための米蔵の鍵、手賀沼干拓事業を行う時に使った事務用品などが残されていました。このことからも、江戸から近現代に至るまでの長期間、手賀沼干拓を行った中心人物として活躍したことが分かります。

裃（上）、蔵の鍵（中）、事務用品（下）

次回の月例会は・・・

次回は平成３０年６月１日（金）９時３０分から新館で行います！！よろしくお願い申し上げます。

旧村川別荘だより

135号

平成30年6月15日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：木村、田中、手嶋、今野
〒270-1166
我孫子市我孫子1684番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

月例会が開催されました

６月１日（金）に月例会を行いました。

月例会では、シフト調整と共に翌日、井上家で行われる蔵の見学会についてご案内しました。

蔵の見学会は天気に恵まれ、お散歩途中の方もいらっしゃり、飛び入り参加していただけました。ご参加いただいた方、ありがとうございました（＾＾）

「海外からのてがみ」展

今回は、杉村楚人冠記念館の高木さんに、現在記念館で開催している「てがみ展　海外からのてがみ」展の解説をしていただきました。

楚人冠を紹介するときに「国際ジャーナリスト杉村楚人冠」という言葉が使われます。では、なぜ「国際」なのか、それは、楚人冠の元に届いた手紙を見ることによってわかります。それでは、「国際」という言葉が合っているのか見ていきましょう。

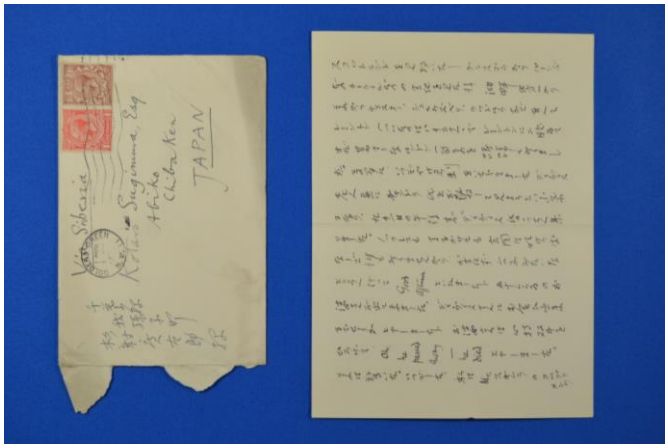
●海外に渡った日本人から

現在はたくさんの人びとが海外旅行を楽しんでいますが、当時はどのような人が海外に行ったのでしょうか。例えば、楚人冠は新聞記者として取材をするために海外へ行きました。そこで、出会った人々は同業者もさることながら、外交官、英文学者、オペラ歌手、俳優など各界で名をはせた人物たちです。そのような人々から送られる手紙にはどんな背景が隠されているのでしょう？

【芦田均からの絵はがき】

例えば、第一次世界大戦で特派員として渡欧していた楚人冠は外交官の芦田均と出会います。芦田はトルコ共和国を建国に導いた英雄の顔写真が入った絵はがきを使って楚人冠に近況を送ります。当時、この絵はがきを受け取ったとしたら、「時の人」が写った絵はがきになります。しかし、その絵はがきを１００年後見てみると、時間を超えて「歴史的絵はがき」になります。なんとも不思議な気分です。二人の出会いを考えてみても、「国際色」が豊かなこともわかりますね。

次にご紹介したいのは、英文学者福原麟太郎の手紙です。その手紙にはイギリスに行った時、楚人冠の知人に、会いに行った話が書かれています。この楚人冠の知人とは、楚人冠がイギリスに特派員として訪れた際、楚人冠の寄稿を読んだイギリス人か自宅に楚人冠を招き、そこから海を隔てた交流がはじまりました。ここから民間レベルの「外交」を見ることができます。



【福原麟太郎からの手紙】

芸能界からは、舞台役者の曽我廼家五郎をご紹介しましょう。彼はヨーロッパへ演劇の視察に行き、そこから近況を伝える手紙を出します。そこには「（船での渡航は）危険と案じていたが、海上も少し風が荒いだけで、無事にノルウェーに着いた」という旨が書いてあります。これを読んでも一般的な近況と捉えることもできますが、この背景をみると、危険な状況で旅をしていたことがわかります。曽我廼家が渡欧したのは1914年。ちょうど第一次世界大戦がはじまり、日本がドイツに宣戦布告する情勢でした。そして、

この大戦で恐れられたの武器が、ドイツ軍が保有していた潜水艦、いわゆるUボートです。曾我廼家が「危険と案じていた」のは、Uボートによる攻撃…そう考えると大変危険な状況下で投函された手紙であると共に、世界的な事件に密接していたことがわかります。

このように、世界で活躍していく日本人との交流がうかがえます。そんななか、海外で活躍した無名の職人から楚人冠に一枚の礼状が届いています。彼は、イギリス、アールズ・コートで開催された博覧会に出展していました。しかし、英語ができないため、待遇が悪い状態で働いていました。そのとき、楚人冠の助言が待遇改善につながりました。この手紙から、華やかに活躍している人々だけでなく、世界に活躍の場を求めて開拓していく人物がいたことがわかります。

●世界の新聞人

これまで、楚人冠は海外で活躍する日本人の一人であったことをご紹介しましたが、次は「ジャーナリスト」としての活躍をご紹介します。

楚人冠は英米ともに新聞業界の第一線で活躍した人物と交流していました。例えば、海外の新聞の情勢を知るためにアメリカの新聞業界誌購読していました。その創始者との交流も楚人冠邸に残る手紙からうかがえますし、アメリカで初めて新聞学科を創設し、成功に導いたウォルター・ウィリアムズとも懇意であったこがわかります。

楚人冠は記者として記事を書く才能もありましたが、同時に特派員などで海外に行く際、その国の最先端の「新聞学・新聞社としての機構」を学んで、その経験を朝日新聞社で活かしました。それは、これらの人物との交流からもうかがうことができます。

●海外で交流した人々

先ほどご紹介した福原麟太郎が会いに行った人物、ジョージ・ベル・デビス。楚人冠は「デビス老」と呼んでいますが、楚人冠邸には、そのデビス老から来たたくさんの手紙が残っています。実際に楚人冠の著書『大英游記』では、二人の親密な様子が描かれています。そして、彼の手紙には「壮麗な富士の雄姿が脳裏に焼き付いて離れない」という日本愛を感じる文や、楚人冠の生活の変化、日本の情勢などさまざまな「日本」に興味を持っている様子がわかります。

そして、最後にご紹介したい手紙がE. Foussetからのものです。E. Fousset…男性なのか、女性なのか、文面は近況のみ。その文面は「ホノルル、サンディエゴ」などと、訪れた地名が書かれているのにも関わらず、切手はメキシコのもので、旅はまだ続いている様子がうかがえます。そんな旅をする人物の姿が楚人冠の書いた「其の女」とかぶります。「其の女」で紹介されている「F女」は、この手紙の人物のように国から国へと渡り歩いています。すると、その手紙の人物は女性なのでしょうか？謎が深まるばかりです。楚人冠が「其の女」と出会ったのは第一次世界大戦特派からの帰路です。そう考えると、その時代に女性が一人旅をして、なおかつ、楚人冠と政治談議を交わす教養と知識を持っていたということにも驚きです。

【「其の女」からの手紙】

これらの手紙を見るだけでも、「国際的」な楚人冠像を思い描くことができるのではないでしょうか。ぜひ、資料を見に記念館へお越しください！

内覧会のお知らせ

7月25日（月）10時から記念館、11時から白樺で、夏の展示会の内覧会を行います。また、11月2日（金）も10時から白樺、11時から記念館で秋の展示会の内覧会を行う予定です。こちらはずいぶん先なので…改めて、10月の月例会でもご案内しますね。

次回の月例会は・・・

次回は平成３０年７月１日（日）９時３０分から新館で行います！！日曜日で発掘がないので、サプライズな人も復活するかもしれません？！そろそろ、暑くなる時期でしょうか？（それともまだ、梅雨が続いているのでしょうか？）熱中症対策をしてお越しください。よろしくお願い申し上げます(*^-^*)

旧村川別荘だより

136号

平成３０年７月２５日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：木村、田中、手嶋、今野
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

いよいよ夏休みです！

あっという間に７月がはじまり、はじまった途端に梅雨が明けてしまいました。これからお彼岸までを考えると、長い夏に気が遠くなりますが、村川別荘の竹の緑が涼しくなる季節でもありますね。まだまだ、上昇する気温に体が慣れていないので、夏バテには十分にお気を付けください。（＾＾）

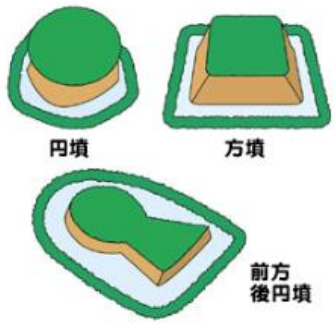
７月の月例会のテーマ

さて、７月の月例会は日曜日の開催となり、発掘現場がお休みでしたので、久しぶりに田中から話をしました。

内容は、今年１月に流山で開催した千葉県北西部文化財発表会の内容をご紹介しました。今年で10回目の節目を迎えた発表会は、様々なワークショップを加えて盛況のうちに終了しました。会場市である流山市が三本松古墳のことを発表されると聞き、我孫子市でも「古墳」について発表しようと思い、以前村川だよりでも取り上げました、根戸船戸遺跡１号墳について、最新の情報を交えてお伝えしました。題して「古墳をつくる-根戸船戸遺跡１号墳の成果-」です。

◆古墳について

古墳とは、権力者のお墓で、だいたい３世紀～７世紀ごろに造られています。はじめ古墳は、どんどん巨大化していきましたが、大きくすることを禁止され、縮小化とともに終焉を迎えていきました。



鍵型のイメージが強い前方後円墳は、実は前が四角なので、鍵型を逆さまにした形が正解です。「前方」から埋葬施設である「石室」がある「後円」への道が伸びています。その見た目の形から「前方後円墳」と呼ばれており、円ではなく後方が四角であると「前方後方墳」と呼称されます。前方後円墳のほかにも、円墳の上に小さな円墳が乗った双円墳や、方墳の上に円墳が乗った上円下方墳などがあります。ちなみに、我孫子では「ダルマ型古墳」と呼んでいるものがありますが、これは、前方後円墳が形を崩したようなこの地域独自の形で、古墳の終焉期に見られる古墳です。今回の根戸船戸遺跡に広がる古墳にも当てはまります。

では、古墳はどのように造られたのでしょうか。当時機械はありませんので、もちろん人力で造られたのですが、かなりの技術が必要でした。例えば、きれいな古墳の形をつくるために、測量の技術を用い、杭や縄をつかって計画的に造営されていました。その造営された場所は、その埋葬される人物が統治していたと考えられる集落の場所や水辺、景色が良い台地の上などが挙げられます。我孫子の場合も手賀沼を見下ろす高台の上に古墳が多くあります。

（古墳づくりの様子の例）

場所が決まると、その土地を整地しなくてはいけません。そして、表土を掘って周濠を造り、古墳によっては、段をつけて形を整える必要があり、斧や鋤など多くの道具が使われました。

こうして、古墳を作るのには「人の力（多くの人員と、その監督者）」「道具の力（材料）」「資金」「歳月」が必要でした。そう考えると、古墳を造るにはその統治した人の権力もありますが、造るための技術や組織力の発達も必要で、その力に驚かされます。

◆根戸船戸遺跡１号墳

白山中学校の南にあるこの遺跡は、根戸船戸古墳群の中でも一番手賀沼に近い場所にありました。調べてみると、先ほども登場した「ダルマ型古墳」に似ていることから、古墳時代の終焉期に造られたことがわかります。

古墳の石室を調査すると、中から頭椎大刀（かぶつちのたち）をはじめ、多数の出土品がありました。これらは去年の夏に、江戸東京博物館の「発掘された日本列島展2017」でも紹介されました。

（出土状況）

頭椎大刀が発見されたことは、大変驚きました。また、調査を進めていくと、石室の石が途中で破壊されていることがわかりました。盗掘に入った際、石室の天井が盗掘以前に石室の内部に落ちていたおかげで、内部の遺物は盗られずにすみました。天井の石が守ってくれていたのです。

（出土状況）

石を取り除いていくと、と頭椎大刀の他に直刀3振、勾玉、人骨などが発見されました。頭椎大刀は我孫子市初の出土例であったため、発掘当初から注目されました。この大刀には金属が使われており、発見当初は土の中にあったため、酸化が止められていましたが、空気に触れると同時に劣化が始まるため、すぐに保存処理を施し、展示ができるようになりました。それでも、空気に触れる時間が長いと、状態はどんどん悪くなります。そのため、みなさんにどういった刀なのか紹介するために、写真は上から出土状態のもの、当時の復元もの、そしてそれらの刀の彩色前のレプリカをそれぞれ作りました！3Dプリンタの技術も浸透してきている昨今、本物と違わないものを作製することができました。

（保存処理後の頭椎大刀）

（上記の刀３本の写真はすべてレプリカになります）

ちなみに、古墳を見学してみたい！という方は、根戸船戸古墳群の２号墳は白山古墳公園に保存されています。また、常磐線の北側には日立精機２号墳が我孫子古墳公園に保存されていますので、涼しくなったらお散歩がてらお越しください。

◆今年度の発掘調査

現在、湖北小学校の西側で大規模な発掘調査を行っています。ここでは、古墳時代から平安時代の竪穴住居、掘立柱建物などが確認され、帯金具、墨書土器などが出土しています。特に帯金具は身分を表す装飾品でもあることから、これらはもと湖北高校（現湖北特別支援学校、下の地図の右下にあります）の敷地内にある相馬郡衙正倉跡の関係施設と考えられます。今後の調査結果が楽しみですね！

連絡・お知らせなど

●竹灯篭について

今年は、１０月５日（金）６日（土）に行います。今年は少し新しいことも行いたいと思っています。次回の月例会のときに、現段階でのご都合をお聞きいたしますので、ぜひ、ご参加ください！よろしくお願い申し上げます。

次回の月例会は・・・

夏本番です。水分補給をこまめにとって、体調管理をお願いします。次回は平成３０年８月１日（水）９時３０分から旧村川別荘新館で行います！！(*^_^*)今回もスペシャルゲストを企画しています♪

旧村川別荘だより

137号

平成３０年８月２０日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：木村、田中、手嶋、今野
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

市民ガイド月例会の開催

８月１日（水）に月例会を開催しました。

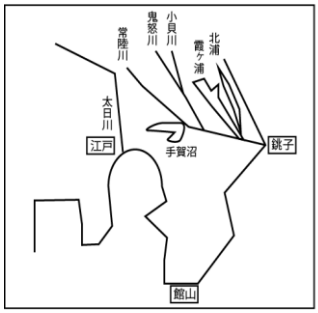
猛烈な暑さが続いたため、７月下旬からガイド活動を休止させていただきました。一体、地球の気温は、どこまで上昇してしまうのでしょうか…。これからは、暑さに加え、台風の発生も多くなりますので、備えを万全にお過ごしください。

「布佐河岸」の誕生　辻より

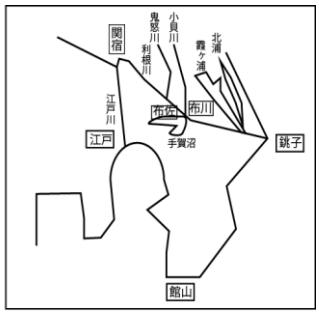
今回は、第１弾として「布佐河岸の誕生」をテーマに、お話をしました。

1.「布佐河岸」の誕生

江戸時代の初め頃、幕府は東北地方からの安定した物資輸送ルートを確保するため、利根川（常陸川）を江戸川（太日川）に掘りつなぎ、銚子から関宿を経由して江戸までの水路網の整備を行いました。この河川改修事業を「利根川の東遷」といい、これにより、「布佐河岸」は誕生しました。



「利根川東遷」以前



「利根川東遷」以後

◆利根川の河川改修史

・文禄３(1594)年

「会の川の締切り」…利根川の東遷の始まりといわれています。羽生付近の会の川を締切り、乱流する流路を整理しました。

・慶長年間(1596～1614)年

「小名木川の開削」…江東から墨田付近の低地に小名木川が開削され日本橋までの水路網が整備されました。

・元和7(1611)年

「新川通の開削」「赤堀川の初開削」

…佐波から栗橋間の水路を新削し、利根川の本流を直接渡良瀬川へ落としました。また、栗橋から関宿間に幅7間の細い溝を初開削しました。

・寛永６(1629)年

「荒川の締切り、荒川の付替」「鬼怒川の付替」

…熊谷市で元荒川を締切り、瀬替えを行い、入間川、支川、和田吉野川へ、水海道付近から丘陵を開削して大木で常陸川へ落としました。

・寛永７(1630)年

「小貝川の付替え」「布川・布佐の開削」

…利根川の水量増加による舟運強化を目指すため、布佐・布川間の開削と小貝川の常陸川（現：利根川）への付け替えが始まりました。

・寛永 12～18(1635～1641)年

「江戸川・逆川の開削」…江戸川の開削は、江戸時代初期で最大の工事の一つ。河川の流路や河道と全く関係ないローム台地を開削し、新しい河道をつけ、瀬替えを行いました。逆川は、利根川の流域をかえ常陸川へ落とすことを目的に開削されました。

・承応３(1654)年

「赤堀川の増削・通水」…増削を行ってきた赤堀川の通水により、利根川の流水が赤堀川へ注ぐようになりました。これをもって東遷・流域変更が完成しました。

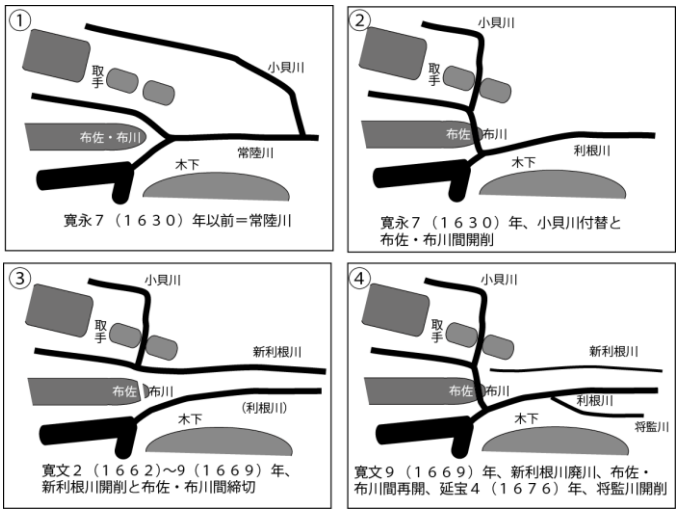
・寛文２～6(1662～1666)年

「新利根川の開削」「布佐・布川間の締切り」

…新利根川が開削され霞ケ浦に直結されました。

・寛文９(1699)年

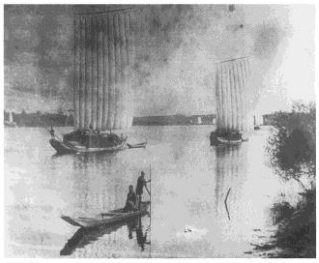
…手賀沼から印旛沼にかけての低地部の新田開発を意識した新利根川開削でしたが、旱害、水害により失敗。布佐・布川間の締切りが解かれました。

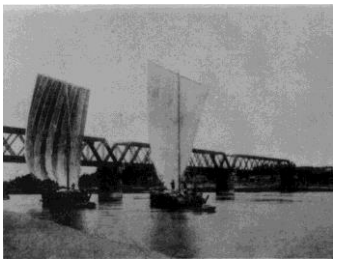


２．利根川の船と運ばれたもの

約60年にわたる東遷事業が完了し、舟運が活発になりました。

利根川を航行した主な船は、高瀬船と呼ばれる帆掛船で、規模としては、大きいもので長さ約16m、米12俵(7200ｋｇ)ほど積むことができました。





領主の廻米をはじめ、大豆、煙草、木材、鮮魚、干物、塩、醤油、酒、酢、油、反物などが、関東、東北の物資として、利根川～渡良瀬川～江戸川～小名木川を通って江戸に輸送されました。樽廻船、菱垣廻船ルートの、いわゆる”下り物”と並ぶ重要なルートとなり、その結果、利根川には河岸と呼ばれる「川の港」が多く存在するようになりました。旧井上家住宅二番土蔵の礎石も江戸の石問屋から入手し、舟運で運搬されました。

３、布佐河岸となりわい

◆布佐河岸と鮮魚街道（なまかいどう）

江戸の人口増加に伴い、鮮魚供給が需要に追いつかなくなったため、幕府は江戸近郊の漁場として銚子沖の鮮魚に目を付けました。 銚子から江戸まで出来るだけ鮮度を保ち、短時間に輸送するために考えられたのが、「舟」と「馬」を利用する方法です。銚子から輸送された荷を、布佐で「馬」に載せ替え、手賀沼の北岸を通り、浅間前から手賀沼を渡り、白井から松戸に至るルート、いわゆる『鮮魚街道』が開通しました。布佐からの鮮魚街道は、木下河岸からの木下街道と鮮魚の輸送をめぐって激しく競争しましたが、正徳６(1716)年に幕府より、「松戸まで付け通し」が認められ、布佐河岸からのルートが主流となりました。この背景には、手賀沼南部地域の新田開発（手賀沼干拓）が密接に結びついています。

◆舟運の衰退

網代場や魚河岸を備えた鮮魚の集積地として栄えた布佐河岸ですが、明治34(1901)年の成田線開通、昭和５(1930)年の利根川堤防改修工事の完成に伴い、河岸としての機能を失いました。

第２弾！！

９月月例会で「布佐と洪水」をテーマにお話しする予定です。お楽しみに(＾０＾)/^^^

連絡・お知らせなど

●日誌って大切ですね

今回の月例会で、吉澤さんより「三樹会日誌」についてお話がありました。ガイドの皆様にも日誌をつけていただいてますので、少し前の日誌を読み返してみました。来荘者が少なく静まり返っていた日、来荘者が多くてんやわんやだった日、心待ちにていた花の開花、害虫との奮闘、別荘についての改善案…などなど、旧村川別荘への愛を感じました。そして、貴重な情報を伝えてくださっていることに感謝。これからも引き続きよろしくお願いします。

●「竹灯篭の夕べ」について

１０月５日（金）６日（土）に行います。今年も、心に残るイベントにするべく頑張りますので、応援よろしくお願いします。

次回の月例会は・・・

次回は平成３０年９月１日（土）９時３０分から旧村川別荘新館で行います(*^_^*)

今年の暑さはまだまだ油断できません。気象状況や体調などを確認しながら、ガイド活動に当たってください。

旧村川別荘だより

138号

平成３０年９月２０日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：木村、田中、手嶋、今野
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

市民ガイド月例会の開催

９月１日（土）に月例会を開催しました。

「暑さ寒さも彼岸まで。」の言葉のとおり、ようやく暑さが和らぎ、凌ぎやすくなってきました。

秋は、新米、秋刀魚、栗…などなど、おいしいものに囲まれ、木々の葉は、赤や黄に色を変え、何とも言えない幸福感に包まれる季節ですね。けれども、今年は豪雨、台風、地震などの自然災害が多く、その猛威に脅える秋となってしまいました。

季節の変わり目で、夏の疲れが出やすい時期です。災害時の対策などを図りつつ、体調など崩さぬよう、慎重にお過ごしください。

「洪水と布佐」　辻より

前回は、江戸時代に行われた「利根川の東遷」により舟運や新田開発が進み、布佐河岸が誕生した…というお話でした。今回は、「洪水と布佐」をテーマに、利根川の東遷の後に起こった布佐地区の災害のお話しをしました。

1．布佐地区における江戸時代の洪水

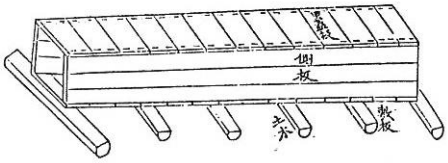
あちこちの河川を堀つなぎ、東京湾から太平洋へと流れを変えた利根川。手賀沼干拓による湿地・低地の新田開発。こうした開発事業により、舟運・河岸運営が安定、水田化により農作物等の収穫量が増えるなど数々のメリットがありました。しかし、喜んでばかりはいられませんでした。自然に手を加えたことによるしっぺ返しが「洪水」という形で利根川流域や手賀沼周辺に来てしまったのです。そもそも「利根川の東遷」は、江戸の水害防止（治水・軍事）対策を目的としたものでもあったようです。

◆対策その1「圦樋（いりひ）」

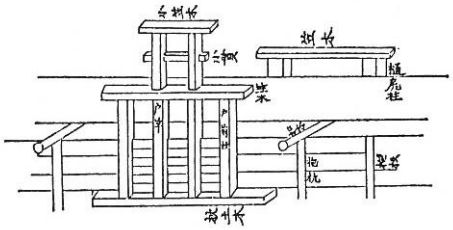
手賀沼から水を利根川に落とし、利根川から逆流を防ぐ目的で造られた「圦樋」と呼ばれる水門施設で水量の管理を行いました。機能的には優れた施設であったようですが、壊れやすく、そのたびに手賀沼周辺は大水害になってしまったそうです。

圦（いり）　樋（ひ）

＜昔の排水管＞☞



＜昔の水門＞☞



◆対策その2「千間堤（せんげんづつみ）」

享保12（1727）年、堤防「千間堤」を沼の中央部（現在の浅間橋）辺りに築き、手賀沼の東側（現在の手賀川や下手賀沼）を干拓しました。しかし、元文3（1738）年利根川の洪水であえなく決壊。再び堤防が作られることはありませんでした。

◆対策その3「赤堀川の拡幅」

天明3（1783）年、浅間山大噴火に伴う火山灰堆積は、河床の上昇によって利根川の大洪水を引き起こし、手賀沼干拓地、また江戸市中にも大きな被害をもたらしました。その対策としてとられたのが、赤堀川の拡幅です。この対策は、江戸の水害を防ぐためのもので、利根川中下流地域の水害をより一層深刻化させ、洪水激化を招く結果となりました。

2．布佐地区における明治以降の洪水

明治維新後、水害の防止と農業用水の安定化のための河川整備が重視されていましたが、大工事をする技術力は乏しい状況でした。そこで、新政府はお雇い外国人として、オランダ工師を招へいし

ました。

明治 16（1883）～明治 23（1890）年、第 1 期改修工事開始。オランダ人のムルデルが利根運河の設計を行いましたが、浚渫、水路幅の拡大などにより、水害を助長することになってしまいました。

明治 33（1900）～昭和 5（1930）年に実施された第２期改修工事は、古市公威ほか、日本人が設計しました。治水に適した高い堤防や、コンクリートの護岸が作られました。利根川からの洪水には効果があったようですが、堤防の内側にたまった雨水の排水が追い付かず、手賀沼の内水洪水が多発しました。

◆話を少し戻して…「切れ所沼」

明治３（1870）年の利根川の堤防の決壊で大洪水が起こり、都地区の一帯だけ水が引かず、「切れ所沼」として残りました。その後、砂で埋めて整地しましたが、平成 23（2011）年の震災の際、そこが液状化したのです。

3．洪水とともに生きる

洪水に悩まされた地域住民は、様々な対策を編み出しました。高く盛り上げた人工地盤（水塚）の上に蔵などの建物を作り、食料を備蓄したり、緊急時に脱出用するためのザッパ舟のなどを保管していました。※旧井上家住宅の蔵が立っているところが水塚です。

洪水が予想される場合は、雨の状況や、河沼の水位の上昇などで予測し、その時に備えて土嚢を積み、収穫時期が近い場合は稲刈りをしました。

洪水になってしまった場合は、役場の罹災制度を受けることにより、食料が現物支給されました。また、堤防の修築工事に従事し、現金収入を得ることができました。

なぜ、このような水害常習地域に住み続けたのか。それは、洪水さえなければとても豊かな土地だったからです。洪水は、毎年起こるものではなく何年かに一度あるかどうかです。同じ辛さや苦しみを経験した住民同士が、協力し合いながら洪水と真摯に向き合う道を選びました。

先人たちの知恵には頭が下がりますね。

連絡・お知らせなど

◆不審者にご注意ください

9月6日（木）、旧村川別荘の下門の池脇で、不審者による焚火事件がありました。シルバーさんが異臭に気づき庭から下を見下ろすと、焚火をしている男を発見。犯行の一部始終を確認し、男に詰め寄って質問したところ、逃げるように立ち去ったとのことでした。警察に通報し、周辺のパトロール強化をお願いしました。

不審者を発見した際は、直ちに警察に通報してください。そして、携帯電話は、常に身に着けていただくようお願いします。別荘の固定電話についても、復旧作業も進めているところですので、よろしくお願いします。

◆ガイド研修会のお知らせ

12月20日（水）にガイド研修会を予定しています。今年は、埼玉県へ。詳細は、次回月例会でお知らせします。皆様、ぜひご参加くださいますようお願いします。

次回の月例会は・・・

１０月の月例会は、平成３０年１０月１日（月）９時３０分から旧村川別荘新館で行います!!(^o^)ゞ

旧村川別荘だより

139

平成 30 年 10 月 12 日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：木村、田中、手嶋、今野
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

月例会が開催されました。

10 月の月例会が行われました。10 月及び 11 月のシフトの調整と、竹灯篭の夕べの当日の分担について確認しました。

いよいよ、竹灯篭です！今年は、金曜日がＳＰレコード鑑賞会、土曜日がコカリナの演奏をお願いしています。ご都合がよければ、お越しください。

井上家の歴史（前半）

今回は、前回までの布佐の歴史、洪水の歴史を踏まえて、井上家の歴史をテーマに手賀沼干拓と、井上家がどのように布佐へやってきたのかをお話ししました。

1．　手賀沼干拓

〇新田開発の種類

代官見立新田…幕府・諸藩によって進められる新田。「土豪、町人、百姓などが開発を出願して、代官が調査し、許可する」ものと、「代官自らが所管内の開発可能地を見立てて開発を主導して開いた新田」とに二つに分けれられますが、代官見立新田といった場合、後者を指すことが多いです。

町人請負新田…町人の生活が裕福になる元禄以降に行われた新田開発。資金のある町人たちが耕地の開発を出願し、自らの資金で開発を行います。開発後はその土地の地主となり、入作（いりさく）百姓（その土地に住んで耕作する人）や出作（でさく）百姓（他所から来て耕作する人）たちを小作人としました。

村請新田…村役人（名主、組頭、五人組）以下村民の総意という形で開発を立案し、出願して拓かれた新田。

以上のような新田開発がありました。井上家の新田開発は「町人請負新田」に当たります。

〇町人参入の手賀沼干拓

寛文 11（1671）年江戸の商人、海野屋作兵衛ら 17 人の商人を請け負い方として手賀沼開発許可が下りました。…商人による第一次手賀沼干拓

→海野屋作兵衛は発作新田に現在まで居住していますが、それ以外の人物は干拓が困難を極めたため、江戸へと引き上げました。

貞享４（1687）年に町人請負新田は原則として禁止されます。

→新田開発で耕作地が広がったため、労働力不足による本田の荒廃、無理な干拓事業による構造被害の増加などが考えられます。

享保 12（1727）年、井上佐次兵衛が新田開発に乗り出します。…商人による第二次手賀沼干拓

〇手賀沼干拓について（『旧村川別荘別荘だより』138 号も一緒にご覧ください）

圦樋で手賀沼の水を排水し、千間堤で手賀沼を分けることで水を止め干拓を進めようとしました。

圦樋（いりひ）…木製の水門。この水門を手賀沼と利根川の間に設置して、手賀沼の水を利根川へと排水しました。利根川が増水し、手賀沼の水位より上回った場合は、水門を閉じて、手賀沼の中の水の量を調整しました。ただし、利根川と手賀沼の水面の差が小さかったことで、排水もなかなか進みませんでした。

千間堤（せんげんつつみ）…手賀沼を我孫子地区の上沼（かみぬま）と布佐地区の下沼（しもぬま）に分ける堤防。上沼と下沼を分けることで、下沼の干拓を進めようとしましたが、洪水により堤は決壊し、以降造られることはありませんでした。

2.　井上家の歴史

今までの井上家の歴史は、『我孫子市史研究』第９号に掲載されている井上薫さんからの聞き取り「尋ねられるままに」―故郷と八十年を回顧する―によるところが大きかったです。なお、井上薫さんは、井上家第12代当主二郎さんの次男で1906年に生まれました。昭和時代の銀行家で、第一勧業銀行（現みずほ銀行）の初代会長になった人物です。

→この聞き取りからいくつかの疑問が出てきました。

〇相島の由来

薫さんからの聞き取りでは「相島の名前の由来は井上家が名付けた」と、書かれています。

相…下総国相馬郡（新田開発をしている場所）

島…武蔵野国豊島郡（井上家が住んでいた江戸）

→まず、いままでの手賀沼の干拓の流れを整理しますと、井上家は第二次手賀沼干拓期に参入しており、参入当初は、もともとの干拓地を譲り受けるかたちでした。

そこで、井上家文書を見てみると、井上佐次兵衛が相島新田名主になったのは、享保19（1734）年10月前後とわかります。また、その３か月前の享保19年７月に作られた文書には、「相島新田名主久左衛門」と書かれています。このことから、佐次兵衛は久左衛門から土地を譲り受けており、譲り受ける前から佐次兵衛が土地の名前を名付けられる可能性は低いと考えられます。

現在のところ、それに代わる由来についてはわかりませんが、久左衛門の屋号が「相模屋」ですので、何か関係するのかもしれません。

〇江戸の井上家について

井上家資料を見ていくと、一番古い資料は江戸時代のもので、井上家が江戸に住んでいたことがわかります。実際に薫さんの聞き取りを見ると「銀座六丁目付近（尾張町）で乾物屋を営んでいた。屋号は近江屋である。間口五間で奥行が二十間であった。尾張町で名主をしていた」と語っています。

→そこで、国立国会図書館に所蔵されている沽券帳を見てみると、「尾張町二丁目（中略）表田舎間五間、裏行街並弐拾間」とあり、薫さんのお話しと一致します。そして、この家屋敷は延享２（1745）年に佐次兵衛の名で売られているのがわかることから、享保には布佐に地所を求めたものの、延享までの20年間弱は江戸との縁もあったことがわかります。

また、井上家の資料を見ると名主と書かれた資料はありませんが、「家守（やもり）」と書かれた資料があり、江戸では家守を行っていたことがわかります。家守とは江戸時代、 地主・家主に代わってその土地・家屋を管理し、地代・店賃(たなちん)を取り立て、また、 自身番所に詰めて公用・町用を勤めた人です。

以上のように井上家は町人主体の手賀沼干拓に参加し、江戸から布佐へと定住していったことがわかります。今後は、井上家が布佐でどのように展開していったのかをみていきたいと思います。

お知らせ

〇内覧会を行います。

以前、お手紙を差し上げましたとおり、11月２日（金曜日）に白樺文学館と杉村楚人冠記念館で内覧会を行います。詳細はお手紙をご覧ください。

〇研修会を行います

12月20日（木曜日）に研修会を行います。今年は埼玉県比企郡川島町に行きます。訪問する場所は広徳寺の茅野葺き替え、遠山記念館です。

遠山邸は、日興證券の創立者、遠山元一（1890-1972）が、幼い頃に没落した生家を再興し、苦労した母、美以の住まいになるようにと、昭和８年から２年７ヶ月の歳月を費やして完成させて大邸宅です。

当日のスケジュールは未定です。決まり次第、ご連絡いたします。次回の月例会の時に出欠を伺う予定ですので、ふるってご参加ください！

次回の月例会は・・・

平成30年11月1日（木）午前９時半から旧村川別荘新館にて月例会を行います。紅葉が綺麗な時期になっているでしょうか。今年の葉っぱの色づきを考えると楽しみになりますね。

旧村川別荘だより 140

平成３０年１１月１４日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：木村、田中、手嶋、今野
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

月例会が開催されました

１１月月例会が開催され、１１月分・１２月分のシフト調整を行いました！(*^_^*)

10 月に開催した竹灯籠の夕べ、１日目は小雨、２日目は強風とあいにくの天気でしたが、無事（？）、開催することができました。今回のご来荘者は 351 人でした。小雨よりも風でロウソクの火が消えてしまったことが、来年の課題となりました。

研修会のための研修会

今月の月例会では、来月行く埼玉県比企郡川島町の訪問先についての説明をしました。

１　川島町について

川島町は埼玉県中部に位置する町で、川越の北にあります。我孫子市から車で通常１時間 30 分ほどで着く位置にあります。

２　主な文化財について

川島町には国指定文化財が七つあり、そのうちの一つが今回見学する広徳寺大御堂です。その他六つは美術品・工芸品で、これらは今回訪れる遠山記念館にありますが、残念ながら、今回は美術館がお休みなので、鑑賞することは難しいです。

その他にも県指定、市指定文化財、国の登録文化財があります。国の登録文化財は、遠山記念館の建物になります。

３　広徳寺大御堂

この大御堂が立つお寺は、頼朝に従って武功をあげた美尾屋十郎広徳の菩提を弔うため、頼朝の妻北条政子が美尾屋氏の館跡に建てたといわれています。

大御堂は茅葺屋根になっていて、今年度、茅葺の葺き替えをすることとなり、めったに見ることができないので、見学させていただけることになりました。そこで、今回の月例会では、茅葺について少しお話しをしました。

○茅葺屋根について

茅葺屋根とは植物性の草類で葺いた屋根の総称であり、「茅」という植物はありません。また、地域によって使われる植物の種類が違うため、地域によって○○葺きとして読んでいました。例えば、笹葺きや草葺き、麦藁葺きなどです。「茅葺」という呼称は比較的新しい言葉です。

茅葺というと一般的に草葺きとクズ屋根の二種類に分けられます。草葺きはススキ、笹などの草や、木の枝の植物を屋根に葺くもので、クズ屋根は稲藁、麦藁など、実や皮などの収穫後に残った不要物（屑）を屋根に葺いたものになります。草葺きは、屋根材そのものに断熱材があるので、夏は涼しく、冬は暖かいです。

笹葺きの屋根

○耐久性

美しい茅葺を維持するには、昔から一世代約30年間ごとの葺き替えが必要といわれています。ただ、これはススキやヨシの場合で、材質によって5年～15

年程度といわれています。その他にも湿地に生息するウミガヤはもちが良く、ススキなどのヤマガヤは弱いともいわれています。

破損で最も多いのは腐朽で、北側の屋根などは日当たりが悪いため腐りやすいほか、カラスによる茅の引き抜き、紫外線による屋根表面の摩耗があります。また、これらの問題は地域の環境によって左右されます。例えば、北国は湿りやすいため腐朽が問題であり、南国は日差しが強いため、紫外線による影響が大きいです。

〇屋根の補修について

屋根の素材が老朽化した場合、全面を葺き替えるのは大変なので、程度によってはサシガヤによって一部補修を行うこともあります。また棟飾りや、軒飾りは目につく部分の見栄えを良くするためだけでなく、材料の腐朽を遅らせるためや、防水の目的があります。

屋根を葺くのは結と呼ばれる地域共同体で行う方法と茅手（茅葺き職人のこと）によって行わる方法があります。

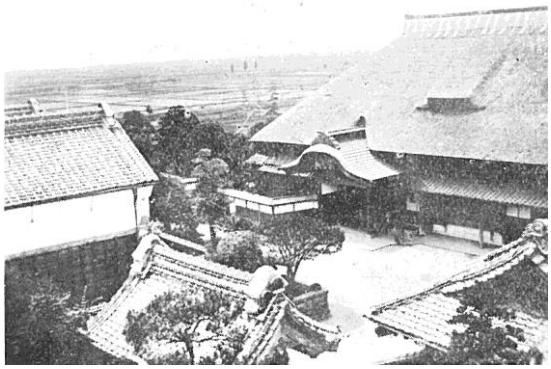
結は一番古い茅葺きの方法で、集落ごとに共同の茅場を持ち、共同で茅刈りを行い、共同で集落の屋根を直します。屋根はいっきに直さず、年ごとに直す家を決めて順繰りに直していきます。今も白川や五箇山あたりでは続いている方法です。茅手に頼む方法は主に南会津茅手か筑波茅手が有名です。これらの茅手は、軒先回りや棟のつくりに針を用いずに手で縄を取るなどの技術があります。職人の世界は文字に残っていないことも多く、また、技術が混ざり合うことも多いので、系譜をたどることが難しいです。

最後に結と茅手の両方の技術を用いる場合もあります。これは、結は平面の簡単な茅葺を担い、軒や棟の職人の腕の見せ所にあたる部分は茅手に依頼する方法です。

〇茅葺屋根の今後

第二次世界大戦中の食糧増産は、屋根葺き材料の茅山までが食糧増産目的で開墾され、材料となる茅が減少しました。なおかつ、戦後は人手不足により屋根の葺き替えができないうえ、法律により可燃物の屋根材使用が困難となり、茅葺屋根は減少の一途をたどりました。そのため、鞘掛けと呼ばれる茅葺の上から金属板を被せる工法がひろまりました。布佐にある旧井上家住宅はこの方法をとっています。式台玄関から上を覗くと茅葺屋根を確認することができます。もしかしたら、アライグマの関係でもうすぐ塞がれてしまいますが、お越しの際は、ぜひ、ご覧ください！

現在の旧井上家住宅



戦前の旧井上家住宅
奥に干拓された手賀沼が広がっていますね。

連絡・意見交換など

●冬時間について

・12 月より開始したいと思います。（開始と終了を30 分短縮します。）冬時間は２月までになります。

●12 月１日（土）に日立経営研究所庭園の一般公開を行います。

●空欄のシフト表を数枚、日誌に挟んであります。忘れてしまったときなど、お使いください。（足りなくなったらごめんなさい）

次回の月例会は・・・

次回の月例会は１２月１日（土）９時３０分から旧村川別荘新館で開催します。新しいガイドさんもいらっしゃるかもしれません！ぜひ、ご参加ください♪

朝晩と日中の気温の差が大きい季節です。お体にはお気を付けください！

旧村川別荘だより

141

平成３０年 12 月 11 日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：木村、田中、手嶋、今野
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

月例会が開催されました。

12 月１日（土）に月例会が行われました。今回の月例会は新ガイドさんも参加してくださいました。11 月には新ガイドさんを対象に旧村川別荘市民ガイドのオリエンテーションを行っていますので、１月からしばらくの間、先輩ガイドさんと組んで実地研修をしていただく予定です。みなさまよろしくお願いいたします(*^-^*)

てがみ展展示解説を行いました。

現在、杉村楚人冠記念館で行われている「明治時代の世界一周旅行」は、11 月に現地で内覧会を行ったため（ご参加いただいた方、ありがとうございました！）、今回は来年の１月 16 日（水）から開催される「てがみ展～我孫子に集った人々」（３月 10 日（日）まで開催）の展示解説を高木学芸員にお願いしました。

今度のてがみ展の内容は、大正～昭和初期の我孫子に訪れた人々に焦点をあてました。当時の我孫子は、白樺派の文人や杉村楚人冠が居住していたことから、「文士村」の様相を呈していたことが知られています。しかし、我孫子に集った人々は「文士」ばかりではありません。教育家の嘉納治五郎、西洋史学者村川堅固、日本郵船社長大谷登、三菱鉱業会長三谷一二など・・・。杉村楚人冠宛ての手紙から、我孫子への想いや楚人冠との交流など、我孫子に集った様々な人びとを紹介します。

そのてがみ展の注目するべき資料は、まだ一度も発表されていない、嘉納治五郎から楚人冠に宛てられた手紙です。この手紙は、平成 28 年１月に寄贈された杉村楚人冠関係資料群のなかに、未公開書簡（手紙）二通が含まれていました！その手紙について今回お話がありました。

■嘉納治五郎について

嘉納治五郎は万延元年（1860）生まれ、まだ東京帝国大学という名称になる前の東京大学を卒業しています。明治 15（1882）年には、柔道を考案し、講道館を創立します。また、第五高等中学校校長になったことで、当時学生であった村川堅固や教師として赴任していたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）との交流がありました。

明治 42（1909）年になると国際オリンピック委員会（IOC）委員にアジア人として初めて就任し、夏季東京オリンピック大会、冬季札幌大会の誘致に貢献するも昭和 13（1938）年にカイロからの帰途船上で病死します。77 歳でした。彼の墓所は松戸の八柱霊園にあります。

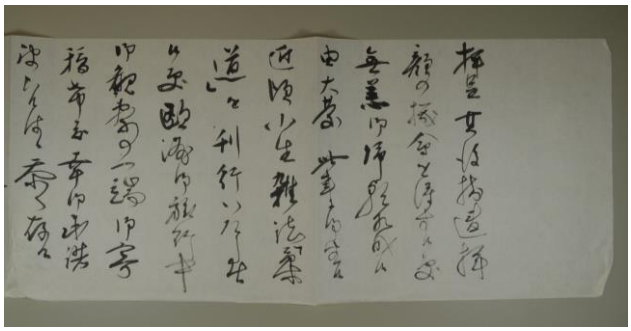
■嘉納治五郎と我孫子

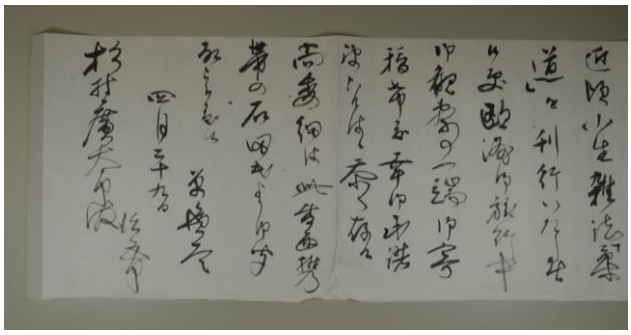
楚人冠の記述から嘉納治五郎が我孫子に別荘を構えたのは、銀座で薬種問屋を営んでいた島田久兵衛に次ぐと書かれていることから、かなり初期であったと考えられます。ただ、なぜ我孫子に来たのかは、いろいろな説がありますが、理由はまだわかっていません。

我孫子での嘉納は、楚人冠に言わせると「実に物やさしい一個の好々爺であった。いつもにこにこして村の人々に接し、まめやかに村の問題に世話をやかれた。」と、あることからもわかるように、村のよき先輩としての立場がうかがえます。嘉納の人柄については、楚人冠の随筆が配られましたので、ぜひ、読んでみてくださいね。この随筆は嘉納が創刊した『柔道』の昭和 13 年に出た９巻６号が嘉納治五郎追悼号でしたので、そこに掲載されたようです。

■新発見書簡

今回展示する手紙のうち一通は嘉納が創刊した雑誌『柔道』への寄稿依頼で、もう一通は嘉納が使用していた、天神山（嘉納別荘の所在地）から見た手賀沼風景の絵葉書の注文を杉村楚人冠に依頼するものでした。



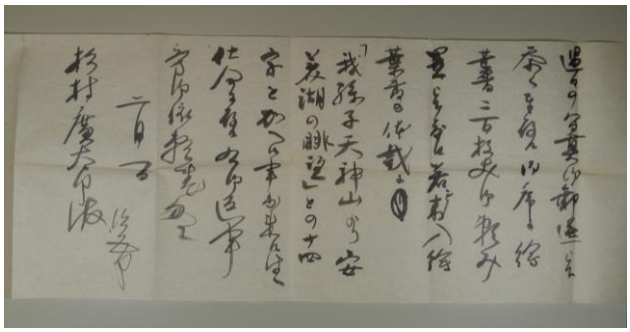


写真：（上下）雑誌『柔道』への寄稿依頼の手紙

まずは、雑誌『柔道』への寄稿依頼です。この手紙には、年が書かれていませんが、『柔道』の創刊が大正３（1914）年であったこと、楚人冠の海外派遣が大正３年から４年であったことから、大正４年の手紙だと考えられます。そして、嘉納は楚人冠に「欧州ご旅行中の観察の一端」を依頼しています。このとき楚人冠が海外派遣された理由は第一次世界大戦の取材でした。この内容を記事として希望したことからも、雑誌名は『柔道』でしたが、柔道だけでなく教養を目的とした総合雑誌であったことがわかります。

次に紹介したのは絵葉書の注文です。書面のなかで「我孫子天神山より安美湖の眺望」と入れてほしいと書いてありますが、この絵葉書は村川さんがお持ちの絵葉書（写真：右側中段）を指すと考えられ、村川さんがお持ちの写真絵葉書のシリーズを楚人冠がまとめて注文していたことがわかります。

また、絵葉書にある「安美湖」という文字は駅前にあった銭湯でも使われていていましたが（写真：下段『我孫子～みんなのアルバム』より）、誰が考えたのかいままでわかりませんでした。しかし、嘉納は自身の随筆にも「安美湖」と使っていることから、彼が我孫子を PR するために考案して使っていたと考えられます。嘉納も楚人冠と同じように我孫子のよさを広めたかったのですね。



写真：絵葉書注文の手紙

次回の月例会は・・・

平成 31 年１月８日（火）9:30 から旧村川別荘新館にて行います。

今年も、みなさまのおかげで実りある一年を送ることができました。どうぞ、よいお年をお迎えください。

旧村川別荘だより

142号

平成31年1月22日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：木村・手嶋・田中
今野・美濃
〒270-1166
我孫子市我孫子1684番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

市民ガイド月例会が開催されました

あけましておめでとうございます。猛暑によるお休みや、竹灯籠の夕べも風が強いなか行うなど、大変な一年でしたが、ガイドのみなさんのおかげで無事、旧村川別荘の魅力をお伝えすることができました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

１月８日（火）に月例会を開催し、１月と２月分のシフトを調整しました。２月２３日（土）～３月３日（日）のひなのまつり開催期間中は、二人シフト体制でお願いします！

川島町研修会を行いました

昨年１２月２０日(木)に、川島町研修会を行いましたので、その様子をご紹介します。

●遠山記念館

＜遠山記念館玄関＞

日興証券の創立者である遠山元一（げんいち）が幼少期に手放した生家を再興し母の住まいとしたもので、昭和８年から２年７カ月を費やして完成しました。昭和２３年に母の美以（みい）が亡くなると、元一の接客に使用され、その後、邸宅の保存と元一が長年にわたって集めた美術品を広く一般公開することを目的とし、昭和４３年に財団法人の認可を受け、昭和４５年に開館しました。平成２５年１０月には公益財団法人の認可を受けています。また、平成３０年には国指定重要文化財になりました。

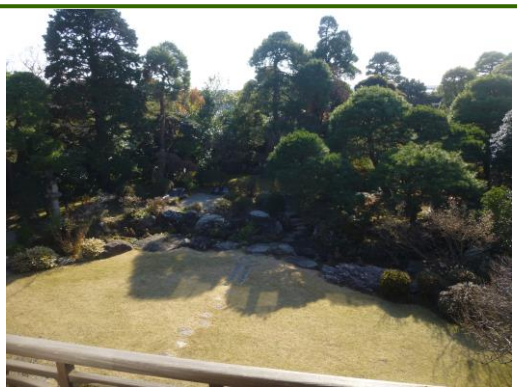
長屋門、渡り廊下でつながる東棟、１８畳の大広間を中心とした中棟、茶室建築の意匠を取り込んだ西棟から構成される伝統的日本建築です。武家風と農家風なのは、格式を必要とした起業家としての顔と、もとは農家であったことが関係するようです。また、すべての部屋に外光が入るような構造になっています。

建物は建築された当初から増改築していないことが特徴ですが、東棟の居間の畳は縁が無く、一部は斜めになっているのは、川島町出身のアーティストによるもので、近代美術とのコラボレーションもしています。

＜化粧室＞

２階は基本的に一般公開されていませんが、今回は特別に許可をいただくことができました。

応接室の床の縁には寄せ木細工が施されているなど、一階とはまた違った趣向が施されていました。景色がきれいでしたね。



＜２階から見た庭園＞

＜2 階の様子＞
左：フローリング

右：西棟の寝室

ガイドは学芸員の久保木さんにご案内いただきました。ありがとうございました。

●広徳寺

川島町にある国指定文化財のひとつである、大御堂の茅葺き屋根の葺き替えを見学させていただきました。覆屋をした内部も見学し、屋根の葺き替えを間近で見ることができました。

解説の様子

葺き替え中の屋根

一日の長時間研修、ありがとうございました。遠山記念館は１時間 30 分ほどの見学時間をとっていましたが、見どころがありすぎて、時間が足りませんでしたね。学芸員の久保木さんのお話も面白く、ガイドさんからの質問も答えてくださるなど、参考になる点が多かったと思います。

広徳寺の茅葺は、まだ、川島町民のみなさんにも公開していないそうです。我孫子市内にも茅葺のお家はまだあるので、今後のための勉強となりました。

連絡・意見交換など

●ひなのまつりのお知らせ

いよいよ、“ひなのまつり”の季節がやってきます。搬入を２２日（金）９時３０分から、撤収を３月４日（月）に行います。それに伴い**３月の月例会を４日（月）**に行います。撤収は月例会の後に行う予定ですので、ご都合がよろしければ、お手伝いいただけますと助かります(*^-^*)

次回の月例会は・・・

２月１日（金）に行います。寒い季節になり、風邪ひきさんやインフルエンザが流行してきました。ガイドさんはお客さまにお会いする機会が多いので、体調管理を大切にされてください！

旧村川別荘だより 143

平成 31 年2月 15 日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：木村、田中、手嶋
今野、美濃
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

市民ガイド月例会が開催されました

２月の月例会が開催され、３月と４月分のシフトを調整しました。

２月23日（土）から3月3日（日）まで「ひなのまつり」を開催します。です。ぜひとも、ご協力をお願いいたします(^O^)

テーマ展示「白樺派と我孫子」

今月は、白樺文学館の展示テーマ「白樺派と我孫子2019」について、白樺文学館の稲村学芸員より説明がありました。

・我孫子の近代文化空間

我孫子の近代の幕開けは、１８９６（明治２９）年の常磐線我孫子駅の開業に始まったといえます。１９０６（明治３９）年には、我孫子駅南側に山一林組我孫子製糸工場（現在のイトーヨーカドー我孫子南口店）が設置されました。

１９０７（明治40）年、日本橋で薬種問屋を経営していた島田久兵衛が子の神（現在の寿２丁目）に別荘を設けたことを皮切りに、嘉納治五郎、杉村楚人冠、村川堅固などが続き、この頃から別荘地「我孫子」という時代が始まりました。1914（大正３）年には、柳宗悦が叔父である嘉納治五郎の縁で我孫子に移住しました。柳にとっての我孫子は、朝鮮陶磁器との出会いや浜田庄司との出会い、バーナード・リーチとの絆が深まるなど、「民藝」へと続く『出会い』と『絆』の地となりました。この柳の移住がきっかけとなり、1915（大正４）年９月には志賀直哉が移住しました。志賀にとっての我孫子は、新たなステップを踏む「創作」の地となり、「暗夜行路」を執筆しました。志賀移住の翌年、1916（大正５）年には、武者小路実篤が移住しました。1949 年に志賀直哉が発表した「稲村雑談」によると、武者小路が医者に胸が悪いという診断を受けたことから、志賀が購入した地所に家を建てるように武者小路に勧めたことが記述されています（結局、武者の胸の病気は医者の誤診であったため、武者小路は一年経たずに宮崎県の日向へ移ってしまいました。このあたりの話は武者小路が書いた「或る男」をご覧ください）。武者小路にとっての我孫子は自分の理想を実現させるための「思索」の地とされ、社会自己実現を目指して「新しき村」という思想や考え方を熟成するに至ったのです。

・我孫子と白樺派、文化空間を継ぐ芸術家、原田京平

白樺文学館での原田京平の展示の様子

今回の展示では、原田京平の資料を多く展示しています。

原田京平は、画家、歌人として我孫子を描き、詠んだ人物です。恭平・聚文（しゅうぶん・じゅもん）・和周（わしゅう）の名を持ちます。我孫子への移住は 1921（大正 10）年 10 月、新妻の睦を連れて我孫子別荘地の先駆けである島田久兵衛別荘に来たことから始まりました。翌年には最興日本美術院洋画部と岸田劉生の草土社が合流して出来たばかりの春陽会に参加していました（春陽会は、東洋画風の

手法や発想に立つ画風の作品が多く含まれているそうです)。当時我孫子に住んでいた志賀直哉とも交流があり、1923（大正 12）年に志賀が我孫子を去った後、志賀邸の母屋に移住しました。この頃から我孫子は原田を中心に春陽会の若い画家が集まる文化空間となり、我孫子の近代文学空間は、自然と芸術が溢れる空間となったのです。

約７年に及ぶ我孫子の生活を終え、1928（昭和3）年３月、東京の世田谷に移り住み、その８年後、肝臓がんのため 40 歳という若さでこの世を去りました。

ひなのまつり特集！！

♪ひなのまつり始まる♪

2月23日（土）～3月3日（日）

今年も鷲見さんをはじめ、多くの方のご協力により、「ひなのまつり」を開催します。

今年のコンセプトは“貝合わせ”です。大正時代の手毬や戦前の着物なども初登場！！旧村川別荘に鮮やかな色を添え、華やかな「ひなのまつり」となる予定です。

ご家族やご友人など、まだ見たことがない！という方は、ぜひお誘いあわせてご来荘ください。

ガイドの皆様には毎年ご協力いただき感謝の気持ちでいっぱいです。みんなで、お天気の良い日が多いことを願いましょう！！(*^_^*)

文化財展・発掘調査速報展・寄贈作品展を開催しました

２月１６日～１９日までの４日間、我孫子市民プラザにて文化財展・寄贈作品展を開催しました。

●文化財展

昨年度から引き続き中里薬師堂薬師三尊像をはじめ、今年度修復を行った子・卯・未像の３体を合わせた計９体の十二神将像を公開しました。

●発掘調査速報展

昨年の４～１０月に実施した中里の別当地遺跡発掘調査で出土した土器などを展示しました。

●寄贈作品展

寄贈作品展では、「手賀沼」テーマに絵画を集め、文人たちが見た手賀沼の文章もあわせて展示しました。

１６日には職員によるギャラリートークを実施し、１７日にはフレッシュコンサートが開催されました。今年もたくさんの方にお越しいただきました。

連絡・お知らせなど

●4 月月例会の日程変更について

・4月の月例会は4月１０日（水）に行います。ゴールデンウィークにあわせて村川家よりお借りした写真を展示します。４月の月例会ではその内容について、村川夏子さんをお招きして、講義をお願いする予定です。ご参加よろしくお願いします。

●ゴールデンウィーク中のガイド活動休止について

・今年は、ゴールデンウィーク中のガイド活動について、お休みの期間を設けました。

4月３０日（火）～5月2日（木）

5月7日（火）、5月8日（水）はお休みです。

次回の月例会は・・・

・3月4日（月）に月例会を開催します。

午前9時３０分～　旧村川別荘新館

・月例会の後、ひなのまつりの撤収を行います。たいへん恐縮ですが、ご協力をお願いします。

旧村川別荘だより

144

平成３１年３月１１日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：木村、田中、手嶋、今野
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

月例会が開催されました

３月の月例会が開催されました。今年もお雛さまの撤収と合わせて行いましたが、あいにくの雨で、撤収は延期となりました。

今年の「ひなのまつり」も、鷲見さんをはじめ、みなさまのご協力で、無事に終わりました。「ひなのまつり」開催期間中の来荘者は 1,075 人でした。

「三島海雲と杉村楚人冠」

今回は３月 12 日から杉村楚人冠記念館で行われる春の企画展「三島海雲と杉村楚人冠」に向けて二人の関係について紹介しました。

●三島海雲とカルピス

三島海雲は大阪にある浄土真宗の寺に生まれました。これからの世は教育が大切だと考えた母親の努力で学校へ行きます。15 歳で西本願寺文学寮に入学。当時、仏教は廃仏毀釈やキリスト教の影響で窮地に陥っていました。そこで、仏教教育と一般市民を導くべく、僧侶にもより高度な教育を推し進めるべく文学寮ができました。その文学寮に入る予備校的な役割として「反省会」がありました。反省会はもともと教員や学生によって組織されていたサークルで、禁酒などを掲げて社会改革を目指して機関紙『反省会雑誌』を発行しました。その機関紙が東京に進出した際、宗教色を抑えた紙面に変え、のちに『中央公論』となりました。楚人冠もこの『反省会雑誌』に寄稿していました。

文学寮を 21 歳で卒業後、日本国内で英語教師や大学への編入などするなか、周りの同級生たちが布教活動のため中国大陸へと渡っていく姿を見て、自身も日本語教師として中国へと旅立ちました。しかし、中国での生活は楽ではなく、現地で知り合った山林王の子土倉五郎と共に日本製品の取引を行う日華洋行を創業しました。この起業には一つ逸話があります。三島は生涯でただ一度しか自覚的に嘘をついたことがないと公言していました。その嘘は、この起業のためにお金を出資してくれる土倉の姉についたものでした。姉は三島にお金を預けるときに「このお金をすべて土倉と三島が使うという条件で渡す」と言いました。実は、三島が日本に帰国する際、土倉に大阪にいる友人に姉から渡されるお金の半分を渡して欲しいと頼まれていました。姉はよからぬ人にお金がわたる可能性を危惧していたのです。起業するための資金がなかった三島は「二人で使う」と嘘をつき、受け取ったお金の半分を大阪にいる土倉の友人に渡して大陸に戻り、起業しました。

はじめは、日本製品を売っていましたが、日露戦争になり、軍馬の取引のため初めて内モンゴルに行きます。そこで出会ったのが乳酸発酵食品（酸乳）でした。三島は幼いころより虚弱体質であったため、内モンゴルでも体調を崩しましたが、乳製品を食べて体調がよくなりました。その後、中国社会は辛亥革命により清朝が崩壊し、中華民国の建国をうけて、新たな事業をあきらめ、あわせて妻の病気の報を受けたのを機に無一文での帰国となりました。

内モンゴルで酸乳に出会った三島は、帰国後大阪で日本発乳酸菌ヨーグルトを食べてみると、自分が

食べた内モンゴルの乳製品の方が美味しいと思ったので、遊牧民が作る乳製品を商品化できないかと考えました。新事業の立ち上げのため、協力を求めたのは杉村楚人冠と土倉五郎の兄龍治郎でした。楚人冠の友人である医者の長谷川基の病院の一室で乳酸菌開発を進め、「醍醐味」を発売しました。

醍醐味は注文が殺到するほどの人気になりましたが、原材料の牛乳が足りず生産中止になります。しかし、この失敗は、健康ブームのなかで醍醐味の人気は偶然ではなく、体に良い乳製品は必ず国民に受け入れられるという手ごたえになりました。

醍醐味の発売と同時に、醍醐味の副産物である脱脂乳の商品開発も課題となりました。あるとき、脱脂乳に砂糖を加えて乳酸菌醗酵したものが美味しかったので、さまざまな人に試飲を求めました。試飲をした当時小学生で後年芸術家となる岡本太郎は「幼い私にも飲ませて、真面目に「どうですか」と聞かれる。はじめて飲んだ乳酸菌飲料は、とろりと甘酸っぱい味で、嬉しかった」と回想しています。ここからも、相手が子どもでもどんどん意見を取り入れようとする三島の真摯な姿勢を見ることができます。こうして、ついに大正８（1919）年７月７日にカルピスを発売します。

●三島海雲と杉村楚人冠

二人の関係は師弟としてはじまりました。楚人冠は、三島が通う文学寮の英語教師兼舎監として在任していました。出会いは言い訳せず罰を受けた三島の正直さを楚人冠が見込んだことからでした。この事件は楚人冠日記の明治29（1896）年10月９日に出てきます。その後、明治30年５月から楚人冠の日記に度々三島の名前が登場し、英語を教えたり、一緒に山登りをしたりしたことが記されています。三島と楚人冠の年齢差は６歳。兄と弟のような関係でもあったのでしょうか。

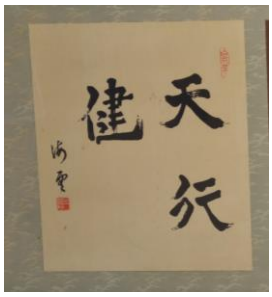
その後、中国大陸から帰国した三島は醍醐味を起業のため、楚人冠に協力を求めました。三島も著書で「陰に陽に支えてもらった」と述べています。

●三島海雲が影響を受けた言葉

「Nature cannot be surprised in undress.」

この言葉はアメリカ人の思想家エマソンのエッセイの一節です。楚人冠が文学寮で２度出題しました。三島はこの意図を、学生たちの英語力を確かめるだけではなく、楚人冠の想い（いつ、自分の心中を誰かに覗かれても恥ずかしくない⇒自然のような人間になってほしい）として受け取っています。

「天行健（てんこうけんなり）」



これは、四書五経の易経のなかにある言葉で、天体の運行は常に規則正しく堅実であることを示したもので、三島は規則正しい生活のなかに真の健康があると考えて生活していました。三島はこの言葉を揮毫することが多く、杉村楚人冠記念館にも所蔵されています。

●おまけ

月例会でどっちが三島さん？となりましたが、中段で左側を見ている方が三島さんになります。画像はポスターでご確認ください！

連絡・意見交換など

●市民観桜会

４月１日（月）午前10時から午後４時まで（入場は午後３時まで）我孫子ゴルフ倶楽部で観桜会が開かれます。なかなか入れない我孫子ゴルフ倶楽部を見学できる機会ですので、ぜひ、お越しください！

●杉村楚人冠記念館の椿の話

杉村楚人冠記念館の椿は個人で収集した椿としては、種類も豊富でなかには珍しいものもあります。先日日本ツバキ協会の方もいらっしゃり、評価してくださいました。今後は、椿の名所としても広めていきたいですね。

●講演会のお知らせ

４月20日（土）13時から三島海雲の講演会を行います。要予約です。４月２日から予約受付を開始いたしますので、杉村楚人冠記念館にお申し込みください(*^-^*)（記念館電話：04-7182-8578）

次回の月例会は・・・

次回の月例会は4月10日（水）９時30分から旧村川別荘新館で開催します。

奥の展示スペースの展示替えに伴い、新しい展示の解説を村川夏子さんにお願いします。